

25 胆管細胞癌の検討

稲吉 潤・田崎 麻子・新井 太
 船越 和博・本山 展隆・秋山 修宏
 加藤 俊幸・土屋 嘉昭*
 県立がんセンター新潟病院内科
 同 外科*

【目的】胆管細胞癌の画像所見，予後と臨床病理学的因子の関係についての報告は少ない．今回我々は，組織学的診断の得られた胆管細胞癌症例を得たので，その臨床病理学的検討を試みた．

【対象と方法】当院で過去10年間に，臨床的に原発腫瘍と診断され，胆管細胞癌の病理診断を得た35例（外科切除（20例），狙撃生検（13例），剖検（2例），肝門部胆管癌の症例は除いた．）につき，1）画像所見，2）臨床病理学的背景と予後の関係につき検討を行った．

【結果と考察】画像所見：dynamic CTのいずれかの相で全例辺縁濃染が観察されたが，腺癌で特徴的とされる平衡相での腫瘍内部への造影効果増強を認めない症例が約20%存在した．臨床病理学的背景と予後の関係：stage IIとそれ以上のstage間で予後に有意差があった．これについては，リンパ節転移の有無（手術所見）が予後因子とする報告があるが，今回，術前診断による検討では，リンパ節転移の有無は，予後因子とはならず，上記結果となった．

II. 特別講演

インターフェロンシステムを攪乱するC型肝炎ウイルス

岡山大学大学院医歯学総合研究科
 腫瘍制御学講座分子生物学分野 教授
 加藤 宣之

第86回新潟内分泌代謝同好会

日時 平成19年10月13日(土)
 午後2時20分～
 場所 チサンホテル&コンファレンス
 センター新潟 4階 越後の間

I. 一般演題

1 心房細動，低コレステロール血症から診断されたTSH産生下垂体腺腫の1例

田村 哲郎・関 泰弘・青木 悟
 片桐 尚*

県立中央病院脳神経外科
 刈羽郡総合病院内科*

TSH産生下垂体腺腫は稀である一方，甲状腺機能亢進には心房細動や低コレステロール(TC)血症の合併は良く知られている．我々は検診で心房細動と低TC血症を指摘されたことでTSH産生下垂体腺腫の診断に到った69歳男性を経験した．6,7年前に検診で心房細動を指摘され，2006年秋には低TC血症(142mg/dl)を指摘された．血清TSH 4.21 μ IU/ml, fT4 3.39ng/mlとSITSHを認め，刈羽郡病院で精査され当科紹介となった．神経学的異常なし．入院時fT3 7.18pg/ml, fT4 2.64ng/mlと甲状腺機能亢進を認め，血清TSHはTRHに3.39から4.07までしか上昇せず．Bromocriptineには抑制されず，octreotideには3.29から2.02まで軽度抑制された．MRIで鞍上進展を示すmacroadenomaを認めた．経鼻的下垂体腫瘍摘出術を施行し，腫瘍はTSHとPRLに陽性であった．術後TSH 1.29, fT3 5.57, fT4 1.94とわずかに高いままであった．心房細動は器質的変化のため持続した．